

## 平成 30 年 第 9 回男女共同参画セミナーを終えて

2018 年 9 月 14 日から 16 日まで広島県広島市の広島国際会議場で開催された日本植物学会第 82 回大会において、学会 2 日目の 15 日に男女共同参画セミナー「あなたも、明日にも直面するかも、介護の問題」をランチョンセミナーの形式で開催しました。他セッションと同時進行での開始となりましたが、150 個用意したお弁当がほぼ配布され、多くの方にご参加いただくことができました。

はじめに三村徹郎学会会長からご挨拶があり、「介護は自分がするかされるか分からないが、ある年齢まで生きると必ず直面する問題であり、自分だけで解決できないことも多いと思われるので、苦労されてきた経験者のお話を聞くことが大切」とのコメントをいただきました。日原由香子男女共同参画委員長からは、本学会の男女共同参画ランチョンセミナーでは、これまで育児やキャリア形成の問題を繰り返し取り上げており、介護問題も取り上げてほしいとの希望はあったものの、登壇者が見つからず実現できずにいたこと、今回、外部講師をお招きし、会員からも登壇者が見つかったことで実現に至った経緯の説明がありました。また、一部で「介護問題は男女共同参画マターではない」という声が上がっていることを受け、介護者の 3 分の 2 が女性であること、介護離職者の数も女性のほうが男性の 3 倍多いなど、女性に介護の負担がかかっていることを示す各種の統計結果が紹介されました。さらに、介護問題についての設問を設けた 2016 年ランチョンセミナーアンケートの集計結果が紹介されました。

続いて、認知症の人と家族の会世話人の河合雅美氏によるご講演「仕事と介護を両立するための上手な支援の使い方」がありました。河合氏は約 7 年前に認知症を発症したお母さまのために試行錯誤を重ね、認知症があっても豊かな生活を送れるという方向性を見出しました。また、介護を行いながら 2 人の子育てと薬剤師としての仕事も両立しており、これらの経験をシェアしたいとの思いから各地で講演活動を行っています。以下が講演の要約です。

認知症と診断された初期のころは、人には言わず母娘で抱え込んだ状況で、「認知症になったのだから仕事は辞めて、料理も運転も散歩もダメ」という娘と、「自分は認知症ではない。なぜ娘にこんなに制限されなくてはいけない？」という母の間で喧嘩が絶えませんでした。2 年以上経って「認知症の人と家族の会」の存在を知り、初めて人に相談することができ安心感が得られました。認知症カフェでは色々と情報収集することができまし

第9回 BSJ 日本植物学会 男女共同参画ランチョンセミナー

明日にも  
あなたも直面するかも  
介護の問題

9月15日(土) 12:20~13:20 A会場

植物学会会長挨拶 三村 徹郎 (神戸大学・大学院理学研究科・教授)

男女共同参画ランチョンで介護の話題を取り上げる背景  
日原 由香子 (埼玉大学大学院・理工学研究科・教授)

講演 「仕事と介護を両立するための上手な支援の使い方」  
講師: 河合 雅美 (認知症の人と家族の会世話人、薬剤師)

パネルディスカッション 「私たちの介護」  
河合 雅美  
浦和 博子 (岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授)  
榎原 恵子 (立教大学・理学部・准教授)  
司会: 吉田 聡子 (奈良先端科学技術大学院大学・研究推進機構・特任准教授)

ランチ付  
当日朝、先着150名様に受付付近で  
ランチ引換券を配布します。  
引換券をお持ちでない方も参加していただけます

た。一人で抱え込まず、相談や情報収集をすることがとても大切です。講演会に認知症当事者として登壇を依頼された際、母の思いを色々聞き取り、認知症でもこんなにやりたいことがあるのだ、と気づかされました。「働きたい」という気持ちを満たすためにB型就労支援を利用し、箱作りやお菓子の袋詰めの作業を行うことで、母は生きがいを得ることができました。認知症は徐々に進行していく病気なので、介護認定を受けてサービスを受けられたら一安心ということもなく、進行に従って支援の仕方を変えていかないと穏やかな状態を保つことができません。デイサービスを毎日利用していましたが、認知症の進行とともに多くの方の支援を得ることが必要になってきました。そういった場合にケアマネージャーが重要な役割を果たします。介護者の話を聞き、本人がどうしたいかの希望を聞き、すぐに動いてくれるケアマネージャーを探すことが、きちんと生活を整える近道となります。また、ケアマネージャーと合わないと感じた時には他の人に変えることが重要です。良いケアマネージャーを探すのは口コミが一番と感じています。昨年7月からはグループホームに入居しています。ホームに入ってから、母娘でイベントに参加して楽しむ機会が増えました。認知症は進行していくため、常に一步先のことを考えながら支援していくことが必要です。認知症を持ちながらの充実した生活を再構築することが、子供世代にしてあげられる重要なことだと思います。

続いて、吉田聡子奈良先端科学技術大学院大学特任准教授の司会によるパネルディスカッション「私たちの介護」では、河合雅美氏に加えて、ご両親の介護経験をお持ちの学会員である浦和博子岐阜聖徳学園大学准教授と榊原恵子立教大学准教授にパネリストとして登壇していただきました。「突然、身内の介護が必要になったときどうしたか」という司会の問いかけに対し、パネリストそれぞれの介護の状況が紹介され、「病院の窓口や、主治医の先生から介護認定を受けるように勧められた」、「大学の男女共同参画の窓口に相談に行った」等の回答がありました。それを受ける形で、司会から、要介護認定の申請からケアプランの作成、介護サービス利用に至る流れの説明がありました。介護の相談先としては「地域包括支援センター」や「居宅介護支援事業所」が挙げられ、後者にケアマネージャーが所属しています。次に「仕事との両立をどうしたか」という問いかけに対して、「ゴールが見えており最期を看取りたいとの気持ちから介護休業を取得した」、「介護認定を受けていなくてもポストクであっても介護休業は取れるという情報の収集から始めた」、「介護サービスを整えるのは大変だが一旦整えれば介護休暇等取得しなくてもやっていくことは可能」等の回答がありました。それを受ける形で、司会から、介護休業・介護休暇・介護のための単時間勤務などの制度に関する説明がありました。「介護を続けていく上でどんな問題があったか」という問いかけに対しては、「何もしてくれないケアマネージャーに当たったときに困った」、「遠隔地介護の場合は急な呼び出しへの対応を考える必要がある」等の回答がありました。最後に「介護と研究を両立するために必要なことは？」との問いかけに対し、「キャリアパスに問題が生じた場合にバックアップしてくれるシステムの充実が必要」との回答がありました。

続いて、総合討論がおこなわれました。会場からの「大学でこういう支援があったら良いという希望があったら教えてほしい」という質問に対して、「介護に関しては、ここに相談しに行くと情報がもらえる、という窓口を明確にしてほしい」、「授業以外の研究や大学業務についての支援もご検討いただきたい」等の希望がパネリストから寄せられました。また、「介護育児に関して、大学職員を助けるために色々な制度があるが、個人の研究費で雇われている若い世代はそういった制度が使えない。こういった問題に関してどこに働きかければ良いのかアイデアあったら教えてほしい」という若手からの質問に対して、「こういった問題があり、支援が必要ということを顕在化することが必要。機会があるたびに声を上げていくことが必要」「雇用保険に加入して1年以上経っていれば介護休業を取る権利があるので、調べてみては」といった回答が寄せられました。

今回のセミナーは、介護問題を取り上げるのも外部講師を招聘するのも初めてのチャレンジな企画でしたが、老若男女の聴衆が真剣に聴き入っている姿に、介護問題に対する関心の高さが感じられました。ランチョンセミナーで介護問題を取り上げていくことは、会員への情報提供に加え、問題の顕在化に関しても大きな意味があるとの手ごたえが感じられました。最後になりましたが、今回のランチョンセミナー開催にあたり、お世話になった学会運営委員の方々、パネリストをお引き受けいただいた皆様、謝金規程を改訂するなどして活動を支えてくださった三村学会会長に感謝いたします。



パネルディスカッションの様子

男女共同参画委員会委員長：日原由香子